

作品ただいま制作中！

来年春の開館に向け、アート作品の制作が本格的に始動しました。アーティストたちは、昨年1年をかけて作品プランの検討に取り組んできましたが、作品が街や人、建物とより密接に結びつくよう、実際に十和田市や美術館を視察に訪れています。

6月にはバルーンを使って体験型作品を制作するアルゼンチン出身でドイツ在住のトマス・サラセーノさんが来日しました。長旅の疲れも見せず、到着早々十和田市を訪れ、工事中の美術館や官庁街通りの様子を見てまわりました。通りの美しい景色やユニークな美術館に触発され、新しいアイデアが次々と浮かんできたようです。美術館では作品が展示される空間や周辺の景色を注意



日本の制作メーカーと打ち合わせをするトマス・サラセーノさん

深く観察し、作品のボリュームや通りからの見え方など、細かな検証を行っていました。

また外構照明を作品化する高橋匡太さんの作品は、建築と関連する部分が多く、建築家を交えての協議や模型を使ったスタディ（習作）を繰り返してきました。先日、制作前の最終調整のため、現場で本番さながらの照射実験が行われました。高橋さんも「今回ほど建築家と対話しながらプランを進めていくことはなかった。一つのビジュアルを共有しながらの作業なのでとても楽しめた。」と語っています。

このように十和田市のためだけにつくられるアート作品ならではの制作作業が進行しています。今後、アーティストの訪問にあわせて解説会等を開催する予定ですので、ご期待ください。



現場で照射実験を行う高橋匡太さん

ロゴが決まりました

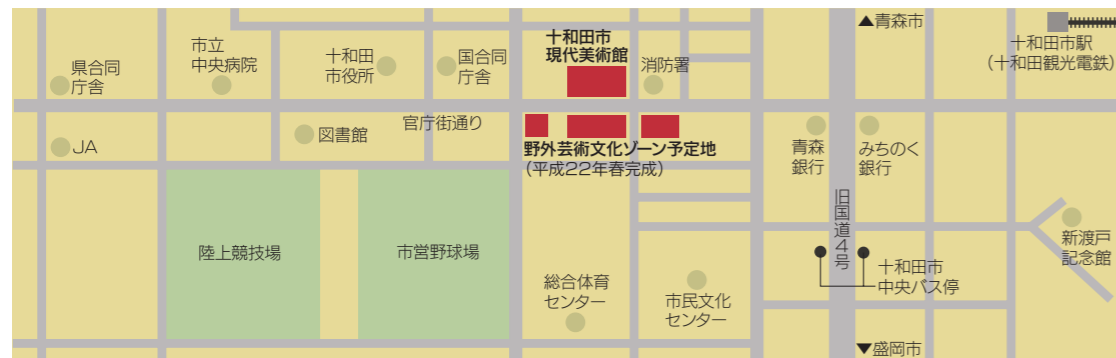
十和田市現代美術館のシンボルマークとロゴタイプが決定しました。デザイナーは、2002 FIFAワールドカップ Korea/Japan ファイナルセレモニー（決勝戦～閉会式）の演出デザインを手がけるなど、幅広い分野で活躍している東泉一郎（ひがしいずみ・いちろう）氏。

シンボルマークは、「完結していない、変化していくようなもの」を基本的考えとし、十和田の「十」と無限大を示す輪「∞」を組み合わせました。現代美術館を核として町や人、アートなどが、これから無限大に繋がっていく、限らないイメージをシンボル化しています。輪

はまた「和」も意味し、「十和田」と書かれてないのに、なんとなく十和田と読める、「単純でも記憶にこびりつく図形」です（作者コメントより）。



現代美術館案内図



十和田市
現代美術館
準備ニュース
vol.1

●発行日——平成19年（2007）8月1日

●編集・発行——十和田市企画調整課

〒034-8615 青森県十和田市西十二番町6番1号

電話：0176-23-5111 FAX：0176-24-9616

ホームページアドレス <http://www.net.pref.aomori.jp/city/~towada/machidukuri/ygbzone/top.htm>

十和田市現代美術館準備ニュース



VOL.1

完成間近!! 十和田市現代美術館



●7月の建築状況（消防署訓練棟から）

青森県十和田市が平成17年から5カ年計画で整備を進めている「野外芸術文化ゾーン」の拠点施設である「十和田市現代美術館」が、来年春にオープンします。場所は、十和田市の中心地、「官庁街通り」の消防署西側。工事は昨年9月から本格的に着手され、1月には、白い外壁が現れ始めました。7月現在では、大小16棟の建物のうち12棟のかわいい「アートのための家」が立っています。残りの棟は来年3月末の完成を目指して着々と工事が進み、今後ますます目が離せない状況となってきます。

アート工事が始まります。

これからいよいよ美術館の『魂』ともいえる「アート作品」を設置する工事が始まります。作品は全部で22点。オノ・ヨーコ氏をはじめとする国内外12カ国の21人の作家がこの美術館に合



●完成予想パース

せて新たに作品を制作し、設置します。部屋全体を作品にしたもの、作品の中に入れるもの、鑑賞者との関わりによって作品として成立するものなど、従来の美術館のように「作品を鑑賞する」だけでなく、一步踏み込んで「作品を体験する」ことができます。設置作業は年明けから本格化します。世界の最前線で活躍するアーティスト達が、十和田市のためにどのような作品を作りあげるか、どうぞご期待ください。

十和田市現代美術館開館に寄せて

来年に迫った現代美術館のオープン。作品選定に協力いただいた専門家に、現代美術館への感想を寄せていただきました。



森美術館館長
アート作品検討委員会委員長
南條史生

なんじょう・ふみお●1949年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部、文学部卒。国際交流基金、ICAナゴヤディレクター、ナンジョウアワードアソシエイツ、森美術館副館長を経て2006年11月より現職。著書に『美術から都市へ』（鹿島出版会、97年）ほか。

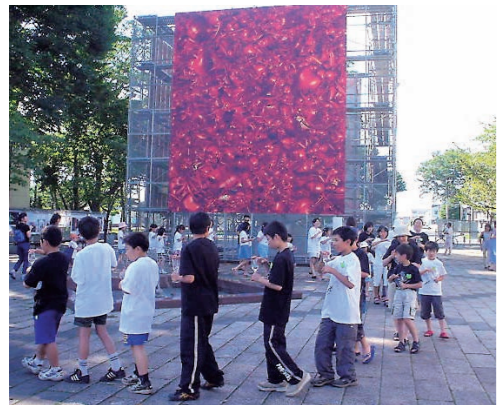
都市とアート、十和田市現代美術館の場合

現代において都市はアートを求めると言っても過言ではないのではないだろうか。隣国アジアでも、アートは創造産業と呼ばれ重要な経済活動の一部と見られつつある。都市開発は競って文化施設を取り込み、文化なしに都市の繁栄はなしとの共通認識が広がっている。多くの場合文化施設が建設され、その後デザインや出版といったソフト産業の基盤として機能する。さまざまな活動は市民生活に刺激を与えながら、常に新しい情報を発信し、都市セールスの機会と長期的な広報効果を提供する。

日本でも公共投資のため巨大な美術館を建てる時代は終わり、文化施設は都市活性化の重要な機能を担うようになった。金沢や熊本でも美術館は交流の場として街の中心に建設されている。一方アートも都市や生活の中に生きようとし、アーティストは地域との対話を求め、地域をベースにした作品を作るようになってきた。

十和田市現代美術館はこうしたアートとそれを取り巻く環境への新しい考え方をもとに、専門家の委員会で検討を重ね、例のない新しいものとして提案されている。建築は巨大な箱でなく、小さなギャラリーの集合体のような構造を持ち、それらがガラスの回廊で連結され、観客は異なる空間を訪ね歩く体験を得る。作品は設置後もその重要性が持続するような興味深く、教育効果が高いものを選んだ。またインスタレーション（空間全体を作品化したもの）、体験型作品、ユーモアや驚きに満ちた作品と技法や表現手法が多彩になるよう配慮した。また地域に根ざした文化活動を継続的に行うための空間も設け、恒久設置作品と市民活動という二つの機能が互いに補完し合い、長期間、低コストで高い評価を得られるように設計されている。

アートは創造産業であると文頭に書いたが、その言葉通りに新しい考え方にに基づき、人々に未来への期待をもたらす独自のものでなければならない。この美術館はまさにその道を開くすばらしいプロジェクトになる事を確信している。



都市と‘アート’をテーマに行われた「アートチャンネルトワダvol.1」（野外芸術文化ゾーンイベント）



造形家（十和田市在住）
アート作品検討委員
花巻庄司

はなまき・しょうじ●1936年十和田市生まれ。岩手大学学芸学部を経て弘前大学教育学部卒。97年まで中学校・高校の美術教諭を歴任し、三本木高校で退職。76～77年青森国体のデザインチーフを務めるなど、受賞多数。03年十和田市文化賞。

十和田市の美術の流れと期待すること

言葉が理解でき始めた中学生の頃から、「文化不毛の地」と何度聞かされた事だろう。開拓地で旦那衆や大商家、豪農等の居なかった当地に、芸ごとを含めた文化は育たなかった。

それでも文化センター開館（昭和61年）前後は、展覧会、発表会等で大変元気があった。あの頃に比べ、個人の多様化、社会の複層化、景気の低迷等によるものなのか最近では元気がないような気がする。

さて、美術分野で当市のこれまでの様子は、どうであったのだろう。私の知っているのは、昭和52年7月約30名で発足し、10年後の昭和61年7月に10回展を催して解散した十和田美術連盟あたりからである。この解散後、愛好会やグループ等の活動はあるものの、組織だった流れは見当たらない。もっと以前はどうだったのか。伝聞によれば、大正12～13年頃三本木小学校に赴任された鈴木是也先生（当市出身、東京在住の示現会理事、日展会員の鈴木實氏のお父さん。また實氏は私の三本木中学の時、美術部顧問として指導して下さいました）が、写生をやらせた。この頃が美術の始まりのようである。是也先生のもとから、彫刻の杉本幸一郎氏が生まれている。その後、昭和14～15年頃「北虹会」、昭和34年頃「からまつ画会」等の絵のグループが散見される。

37年間青年期の美術教育に関わった者として、教科書でなく体感できる場を身近かに持てるのは、柔軟で感性豊かな時期の青少年（幼児を含め）にとってすばらしい。また市民同士、市民と訪れる市民以外の方々との交流から生まれる活気や発見に期待する。美術を介した市民の身近かな応接間となることを願っている。

私たち大人は、どうしても「今」を考え、「今」の結果に左右される。10、20、30年と長い眼で考えたい。この美術館は大きく言えば、街の文化育成に必ず寄与してくれることだろう。そして子どもたちが大きくなったいつの日か、こんな「場」のあるふる里の品格を、誇りに思うことだろう。



十和田美術連盟の展示会風景（市民図書館）



Arts Towada



現代美術館建設現場にて

くりばやし・たかし●1968年長崎県生まれ。活動の拠点を日本に置きながら、国際的な舞台で活躍。自然と人工そして見るものと見られるものなど、ボーダーライン（境界線）をテーマに作品を制作している。



現場打ち合わせの様子（右側高橋さん、左側設計者の西沢立衛さん）

たかはし・きょうた●1970年京都府生まれ。光や映像を用いた作品を多数制作。十和田市現代美術館品では、分棟式の建物をもつ多様な「面」に焦点をあてた照明を行い、昼間の箱の集まりとは異なる景色を生み出すことに挑戦する。



イベント「みんなの松」より

やまもと・しゅうじ●1979年東京都生まれ。松や岩を主なモチーフとする。大学在学中からアルバイトとして携った庭師の仕事が制作に大きな影響を与える。自然に対する敬意から、あえて人工素材を使うことにこだわる。

作家からのメッセージ

現代美術館に作品を展示する作家の皆さんから、作品制作の意気込みと、十和田市に向けてのメッセージ！

栗林隆さん

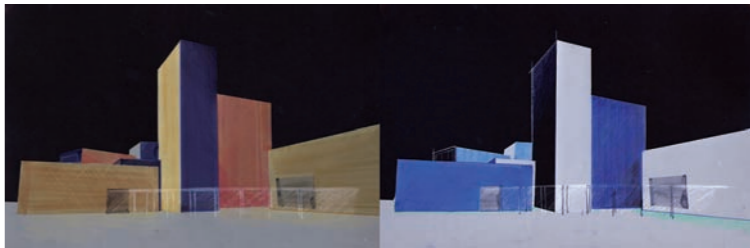
プロジェクトに参加することが決まったとき、とにかく今まで美術館になかったものを作ろう、いつ来ても新しい気持ちで作品をみるができる、育っていくような作品にしたいと思いました。私が常に考えていることは、人がその存在や空間があることは知っていても、普段の生活でとりわけ意識しないものに対して非常に意識することです。美術館であれば、壁や床、天井の裏は誰も意識しない、実はその中やその裏自体も美術館の一部だという考えはあまり一般ではない。そういった、何も意識しない空間や世界を常に意識して作品を作ることが私の根底にあり、十和田の作品でも重要なテーマになっています。

私が初めて十和田を訪ねたときは大雪の降った直後で、想像していた通りの雪国でした。長崎育ちのため寒さが苦手なのですが、雪の世界の空気の緊張感や音が雪に吸

高橋匡太さん

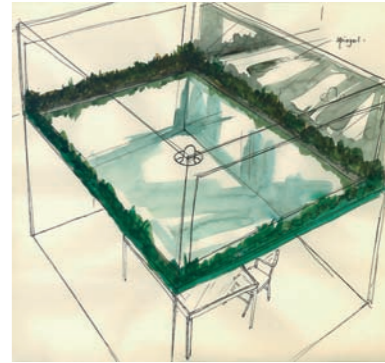
僕は屋外での光の作品を発表する場合、作品と見る人の出会い方がとても気に入っています。かまえずに自然に作品と出会う気がします。

今まで僕は様々な場所でパブリックプロジェクションを展開してきましたが、全てイベント的な一時的なものでした。今回は初めて恒久的に設置されるライティングの作品になるのでとても楽しみです！しかも、美術館の一般的な外構照明は一切無く、代わりに照明が光の作品になっているという、他に例のないプランです。恒久的に設置されるという事で一番意識したのは「時間」の捉え方ですね。特殊な照明機材を制御して、瞬間瞬間呼吸するように常に変化



作品イメージ——“(仮称)十和田市現代美術館ライトアップ”(十和田市現代美術館への提案作品/ドローイング) Copyright Kyota Takahashi

収まれ音の距離感が変わる感じがなんともいえず好きです。これから施工が始まりますが、私自身もこの世界のように神経を研ぎすまし、頭の中から足の指の先までの意識を使って、今できるベストな作品を作りたいです。美術館の箱の中では一番小さな箱ですが、一番広がりを感じさせる作品になればいいですね。



作品イメージ——“(仮称)Untitled”(十和田市現代美術館への提案作品/ドローイング) Copyright Takashi Kuribayashi

しつつけると同時に、年間を通じて季節毎にカラーを変化させる等、街の風景の一部になって、そこに暮らしている人が長期的に飽きずに楽しめるそんな作品になればと思います。先日、十和田市に伺いました。とてもみどりが多くて新緑がまぶしかったです。でも僕は冬の十和田を知りません。僕の作品が雪の中でどんな表情を見せるか今から楽しみです。

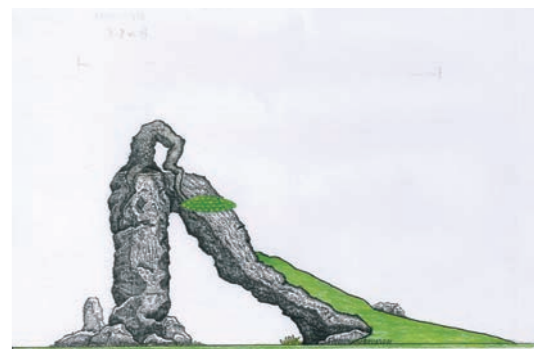
山本修路さん

鳥の羽に付着していた松の種が岩の割れ目に溜まった土の上に落ち芽が出る。しかし、岩の上では常に雨風にさらされ、まっすぐに伸びる事ができずに曲がって育っていく。そのうちに、葉の重みの影響や突風が吹いたときなどに根元の方で折れてしまい、たまたま残った下枝が、したに垂れ下がってしまいながらも葉の重みと雨風に耐え生きている。

このように、作品を作る時に、その松はどのように育ってきたのかということをもまず考える。そうするとそのまわりの環境も自ずと決まってくる。そして逆に、環境から考えても、そこにあるべき松の形状がみえてくる。今回のプロジェクトでは、まず、設置する場所の条件を考慮し、作品の岩の形・大きさ等を先に決め、それから環境の設定をし、その環境に合う松がどのようなもので、どのように育

つかを考えて形を決めていった。

昨年は「みんなの松」で十和田の方と共に壁画を描き、とても楽しい一時を過ごした。そして官庁街通りに植えられた松に出会い、その美しさを改めて認識した。その時の思いを込めて作品制作を続けていきたいと思う。



作品イメージ——“(仮称)松”(十和田市現代美術館への提案作品/ドローイング) Copyright Röntgenwerke AG